大和大学　研究紀要　第９巻　教育学部編　2023年３月　pp.43～52

ゼミでの障がい者施設との協働による授産品の大学内販売活動
－地域と連携した障がい者理解啓発の試み－

Seminar on Selling Products Produced by the University in Collaboration with Facilities for Persons with Disabilities
－An attempt to raise awareness and understanding of people with disabilities in cooperation with the local community－

川　田　和　子*
KAWATA Kazuko

要　　旨

2016年に日本が批准した障害者権利条約への初の国連審査は，特に地域社会における自立した生活(脱施設化)とインクルーシブ教育については緊急的な措置をとるべきだと厳しい勧告となった。特別支援・インクルーシブ教育を専攻とする川田ゼミでは，現学習指導要領の「生きて働く知識・技能の涵養」をめざし，「吹田市障がい者の働く場事業団」と連携した障がい者福祉施設の授産品等の学内定期販売を許可された。「インクルーシブ教育は当事者の子どもたちにとって有益なのか？」という学生の疑問や，障がいのある人の地域移行・地域定着に必要な①住むところ ②就労や日中活動の場 ③支援体制の整備 が，市内の福祉施設利用者一人ひとりにとってフォーマル・インフォーマルな支援でどのように構築されているのかなどを調査・研究していく機会に発展させる。そのなかで学生たちが，インクルーシブ教育のめざす共生社会の実現は障がいのある人にとどまらない，社会が生み出すヴァルネラビリティーすべてを包摂するものであることを発見し，支えていってほしいと切に願う。

Abstract

The first UN review of the Convention on the Rights of Persons with Disabilities, ratified by Japan in 2016, resulted in strict recommendations that urgent measures should be taken, especially with regard to independent living (de-institutionalization) and inclusive education in the community. The Kawada Seminar, which specializes in special needs and inclusive education, was authorized to regularly sell on-campus products from welfare facilities for people with disabilities in cooperation with the Suita City Organization for Workplace for People with Disabilities, aiming to "cultivate knowledge and skills for living and working" under the current Courses of Study. The students' question, "Is inclusive education beneficial to the children concerned?" and how formal and informal support is provided to each user of welfare facilities in the city to build a (1) place to live, (2) place for employment and daytime activities, and (3) support system, which are necessary for people with disabilities to transition to and remain in the community. It is our sincere hope that students will discover and support the realization of a symbiotic society, which is the goal of inclusive education, that is not limited to people with disabilities, but encompasses all the vulnerabilities that society creates.

キーワード：障がい者の権利条約に係る国連勧告,販売学習,吹田市障がい者の働く場事業団
keywords：UN Recommendations on the Convention on the Rights of Persons with Disabilities,Sales Study,Suita City Organization for Workplace of Persons with Disabilities
連絡先：学内内線(1025) e –mail(kawata.kazuko@yamato-univ.jp) 携帯(090-8468-2244)

Ⅰ．はじめに

1．令和4年9月の国連勧告

国連の障害者権利委員会が2022年8月，障害者権利条約に基づき日本政府への審査を実施。9月に日本への初めての勧告を発表した。[1]要改善点には，障害児を分離した特別支援教育の中止や，精神科病院への強制入院を可能とする法令の廃止，入所施設から地域社会での生活に移行できるよう予算配分を変えることなどが盛り込まれた。特に地域社会における自立した生活(脱施設化)とインクルーシブ教育については緊急的な措置をとるべきだと厳しい勧告となった。

*大和大学教育学部教育学科（特別支援教育専攻）
令和４年10月14日受理
[1] 朝日新聞デジタル2022/9/14(水)朝刊10/10森本美紀

2. 特別支援教育とゼミの関係

大和大学教育学部では90%近い学生が教員をめざす。そのうち特別支援学校教員の免許取得者は40％以上にのぼる。3年から学生は興味のあるゼミに分かれ，研究活動を開始する。4年次にその成果を卒業論文にまとめて発表・口頭試問を受け，学士を取得して教員などの進路へ進んでいく場合が多い。筆者のゼミは「特別支援教育インクルーシブ教育」を看板としており，キーワード(学生が 学びたいニーズ)はインクルーシブ教育/職業教育,キャ リア教育/発達障害教育,聴覚障害教育/更生保護,少年院 /貧困,格差/移行期支援である。

3. コロナ下での学びの状況

2022年度の3年生は，多くが当時の安倍首相の鶴の一声で高3の3学期から全国の小中高が6月までの休校となった学年である。入学式もなく，学部ごとのガイダンスと教科書の自宅配送・オンライン授業での履修を開始することになった。国際的な感染封じ込め対策の影響で大学に集えない大学生活の開始，アルバイトの縮小・解雇，国内外での勉強会や旅行・留学のチャンスも奪われた学年である。介護等体験も文科省の特別措置で講義形式に代替され，障がい者の方々との接点も激減する中で，放課後の学童保育や障がい者の移動支援(ガイドヘルパー)，グループホームでの夜勤など，福祉部門のエッセンシャルワークを先輩から引き継いで粘り強く継続する学生もいた。

4. 新学習指導要領の理念による，主体的対話的な深い学びと未知の状況や社会・人生に生かせる資質・能力

今回の学習指導要領改訂による教育課程で高校教育を受けたものは2022年度現在の大学生にはいない。旧課程で学んだ生徒が新課程の主体的対話的な深い学びを実践し，「変化の激しい時代」を乗り越えていく児童生徒の育成を担っていく。そして自らは経験していないが急速に実現したGIGAスクール構想を実践する教員としてのスキルも求められる。

Ⅱ．活動の対象と方法について

1.「はぴすま」吹田市障がい者の働く場事業団との連携

1)すいた障がい者就業・生活支援センターへの相談

このような状況のなかで，筆者は，特別支援教育の研究を志した10人程の自分のゼミの学生に，障がいのある人との協働・交流活動ができないかと「すいた障がい者就業・生活支援センター」(厚生労働省の地方組織。以降「すいた就・…」と表記)に相談を投げかけた。平成20年当時筆者が大阪府立吹田支援学校の教頭時代に，生徒の進路選択・就労支援で「すいた就・…」に尽力いただき多くの進路を開拓できた経緯があった。

2022年3月，「すいた就・…」現センター長内藤氏と当時のセンター長井上氏に相談し，情報と提案をいただいた。吹田市内では，障がい者などを支える素敵なネットワークが，自治体・民間・当事者間で立ち上がっていたことを筆者は初めて知った。

2)「はぴすま」吹田市障がい者の働く場事業団とは

井上正治氏(現在は吹田市障がい者の働く場事業団理事)は，以下のように説明してくれた。

「障がい者の働く場事業団」…さまざまな事業所が共同できるシステムとして構築した。

「はぴすま」のできたいきさつ…「はぴすま」とは屋号で，運営は一般社団法人吹田市障がい者の働く場事業団と言う。ほとんどの人は屋号の「はぴすま」と呼ぶ。他には「社団」「事業団」とか呼ばれている。社団の社員の構成として吹田市内の障がい者事業所が約35か所参加している。

「はぴすま」の業務…役務部門と授産部門がある。

役務部門…▷建物内外清掃 ▷公園等除草・清掃作業 ▷市報すいた等配布作業 ▷美化管理活動 他吹田市より委託されている「吹田市障がい者就労支援事業」

授産部門…▷パンと雑貨のお店「はぴすま」の運営 ▷イベント等出店や出張販売/リラックスボックス（置き菓子販売） ▷吹田ええもんフェスタ開催 ▷他

吹田市では40以上ある障がい者福祉施設のうち35法人が「(一社) 吹田市障がい者の働く場 事業団」を結成し，清掃や除草作業，市報配付などの役務や商店街の一隅に店舗を借り上げた授産品販売を事業団として受け，各施設で分担して収益化するシステムを2009年から構築してきた。事業団は，障がいのある人らの社会参加・地域貢献の機会と工賃確保に向け，施設や支援学校から移行した障がい者が安定して地域に暮らしていけるよう，吹田市福祉部障がい福祉室や厚労省の地域組織「すいた障がい者就業・生活支援センター」と連携してエンパワーしてきた。

2. 吹田市としての地域ニーズ

1)吹田市の障がい者福祉

筆者は，令和2年度より吹田市社会福祉審議会障がい者施策推進専門分科会の委員として市の障がい者福祉にかかわってきた。その中でわかってきたのは吹田市福祉部障がい福祉課のニーズとして，①市内の福祉にかかわる人材確保(コロナ禍で要援護層の支援が家族・家庭にのしかかっている現状[2])②一般市民への障

[2]貧困研究vol.25「コロナ禍と貧困―格差の拡大・政策の検証・困窮者支援の現場－」2020.12

がいのある人への理解啓発(コロナ禍で障がい者等による販売活動やイベント機会は減少)③厚労省事業を吹田市が受託した「こころのサポーター養成講座実施計画」[3]への大学生の参画推進がある。これらに市内の大学として関わり貢献し，加えて学生の主体的な地域の弱者に気づき支える学習を導けないかと考えた。

2)障がい福祉室の思惑

①「市内の福祉施設・福祉事業の担い手に大学生を福祉の人手が足らない。大学生に放課後デイサービスの応援やガイドヘルパー，グループホームでの世話人など福祉部門のアルバイトを知ってほしい。経験して，福祉の仕事の魅力に気づいた人には将来の就職選択肢になるかもしれない。有為の人材に吹田市の福祉分野に参画してほしい。市内の4大学(金蘭千里大学，関西大学，大阪成蹊大学，大和大学)で学生向けの説明会をできればと考えている。

②大和大学で始めたような，大学キャンパス内での障がい者施設の授産品販売による交流・共同学習の市内他大学での展開

③厚労省事業「こころのサポーター養成講座」

また，吹田市障がい福祉室は福祉業務へのアルバイトや正規職員育成をめざし，市内の大学に計画している説明会や，厚生労働省事業「こころのサポーター養成講座」の受託により，障がい者やグレーゾーンの人々へ優しい地域づくりを志向している。これらに賛同しつつ効果測定を行う。

3. 大学生が主体的に地域の協力者となるには

1)教員をめざす学生に培ってほしい思考力・判断力・表現力

福祉施設の販売実習を支援することで，学生の障がいある人々への理解を深め体験を広げる。学内で定期的に福祉施設の販売実習に係る又は目にすることで，学生の障がいある人々への理解を深める。２年次生のカリキュラムである介護等体験において，コロナ禍での令和２年度３年度は福祉施設実習５日間の実習がなかった学生への体験を広げる。大和大学は特別支援学校教員養成や福祉医療人材の育成に力を入れているが，障がい者等の社会参加支援を学生が体験する場を提供し，それを通じて地域に貢献しているアピールをする。

2)大学から販売学習の許可が出る

大和大学は創立9年目で外部団体と連携した活動の実績は少ない。また社会的にもコロナ禍のため外部との交流は困難になっている。初めての障がい者福祉施設との協働及び交流学習に向けて，大学幹部のご尽力のもと様々な調整や確認が行われた。4月末に最初の企画書を出してから2回の修正や販売授産品の確認などを経て，第1回目の活動日6月15日に向けてようやく許可が下りた。以下が大学に提出した企画書である。

Ⅲ．活動の経過と結果

1. 事前学習と学生の意識

事前指導が実施できたのは第1回販売学習直前の週の6月8日で，大学ゼミ室で「はぴすま」[4]から井上優実はぴすま店長や帆足将宏事業団事務局次長に(一社)吹田市障がい者の働く場事業団について出張講義をしていただき，その後全員で「はぴすま」店舗の見学に向かった。店頭で学生たちは商品のイメージを膨らませ，積極的に質問もした。

【6月8日の事前指導について～学生の感想より)】

Aさん：資料と合わせて説明してくださったので，とても分かりやすかったです。川田先生に任せきりになってしまっていたので，事前指導の時に学生を交えた打ち合わせを行っても良かったのかなと思いました。

Bさん：訪問もさせていただいて「はぴすま」さんの様子もわかり，事業所のことについても学ぶことができました。お菓子もパンもおいしかったです！

Cさん：実際の商品などを見させてもらい，とても上手に作っていて，手作りだと聞いてびっくりするような商品ばかりでした。クッキーが気になり買って食べた時はとても美味しくて販売の時におすすめしようと思いました。

Dさん：清掃や草むしりなど，利用者さんの普段のお仕事の様子を見ることで，イメージすることが出来たので良かったです。また，お店で色々な商品 さをり織りや皮製品など実際に手に取ってみて，手間や時間がかかっていることを感じられました。

Eさん：イメージがあまり膨らまず，「当日どんな感じなのだろう」と受け身だったのですが，丁寧に事前指導して下さったおかげで，その分当日の吸収量も増やすことができました。

Fさん：障害のある方も仕事につけていることにすごく感謝しておられ，給料などの問題についても聞きましたが，一生懸命に取り組んでおられることを知りました。

2. 当日，第1回6月15日

1)10時～12時半までの活動の流れ(「はぴすま」さん作成の報告書20220615より)

[3]厚生労働省
https://www.mhlw.go.jp/kokoro/edification/index.html

[4]パンと雑貨のお店「はぴすま」http://hpsm.noor.jp/

開催期日：2022年6月15日(水)10時~12時30分
搬入9時半、搬出13時
大和大学：教員1名、学生7名
事業所：社会福祉法人はあてー「吹田自立の場はあてー」(利用者10名、職員7名)
「はぴすま」：2名
PRESS：大阪日日新聞 10時~11時
見学者：吹田市障がい福祉室、すいた就業・生活支援センター
【販売場所】大和大学構内 食堂棟玄関前

【販売会の様子】学生による販売の様子 「いらっしゃいませ」と声掛けや，会計を行う。

↑はあてーとともに販売を行う。

【取り扱い商品】
・すいぱん（吹田市イメージキャラクター「すいたん」をモチーフにしたパン）
・焼き菓子（クッキー,炭酸せんべい,パウンドケーキ）

↑製造は吹田自立の場はあてー

・ドライフラワーレジンアクセサリー
・さをり織ポーチ
・染め小物他 ←ドライフラワーレジンアクセサリー500円～2000円程度。大学での販売会向けに新たな商品を開発した。

【学内ツアー】
・はあてーからの参加人数が多く，売り場に17名が

←↑学内ツアーの様子。管理棟，講義棟，食堂，図書館などを学生が案内。映えスポットを紹介。

並ぶと混雑が予想されたため，二班編成に分かれて取り組んだ。前後半で，販売と学内ツアーとを行った。

【売り上げ報告】
・パンと雑貨のお店「はぴすま」29,060円
内訳…パン5,400円 焼き菓子17,180円
小物雑貨6,480円
・吹田自立の場「はあてー 」18,550円
内訳…小物雑貨18,550円
「学生さん，教職員のみなさま，本当にありがとうございました！」

2)第1回目の活動について，学生の振り返り
(1)②準備について ③活動について
Aさん：②初めてのことで何が必要なのかが分からないままで，実際に足りていないものも多かったので，今回を活かして次は不足のないようにしたいです。③とても楽しく活動できました。想像していた以上にたくさんの方に買ってもらえたのでうれしかったです。
Bさん：②朝早くから集まって準備したので，時間が余るぐらいでした。③販売はお客さも沢山来て売り切れ続出でめちゃくちゃ楽しかったです。またやりたいです。キャンパスツアーも皆さん楽しんでくれていたので，一緒に回ることが出来て良かったです。
Cさん：②準備の段階でお客さんが来てくれるのかとても心配でした。売り場の置き方などを試行錯誤して見やすいように並べたりするのはとても楽しかったです。③実際にはあてーの人達と関わりながら販売して，言葉が難しい方でも手振りなどで伝えたりしていて少しですがコミュニケーション取りながら一緒に販売できて良かったです。
Dさん：②雨が心配でしたが，時間に余裕を持って準

備できたので対応できてよかったです。③学生が来ない時間帯もありましたが，レイアウトを変えたり，色んな人と交流する時間が取れたので良かったと思います。また，短い時間でしたがキャンパスツアーも楽しんでもらえたようなので嬉しかったです。

Eさん：②準備自体あまりすることはなかったのですが，商品のレイアウトや(風が強かったので)風対策など，難しくもあり楽しかったです。③とても楽しかったですし，良い経験になりました。施設で作られた商品は素敵なものばかりで，お客様に勧めるのが容易でした。

Fさん：②どのようにすればお客さんが来やすいか，など考えながら準備することができました。③時間の関係で施設の方とは関わることはできませんでしたが，施設の方の思いを汲み取りながら接客することができました。

Gさん：②私が想定していたよりもスムーズに行うことができました。商品の陳列も楽しみながら行うことができた。③キャンパスツアーも個人的には楽しかったし，販売も楽しみながらすることができました。

(2)④ 学内での広報について　⑤ ゼミ生以外の学生たちの反応について

Aさん：④SNSを通して，写真や動画などで発信できるとより効果的だと思いました。⑤授業が午後からなのにも関わらず来てくれた人もいて，おいしかったと言ってくれました。来れなくても，興味を持ってくれた人やポジティブな意見が多かったので良かったです。

Bさん：④ポータルで伝えていただいたので，友達もみんな知っていました。チラシも載せたらいいと思います。⑤みんな興味を持っていると感じ，買いに来てくれた学生も沢山いたので良かったです。

Cさん：④もっと私自身周りの友達に広めたら良かったなと思ったりしました。教育学部以外の学生は知らなかったりしたので他の学部の学生にももっと知ってもらいたいなと思いました。⑤私自身他の学生が来てくれるのかとても心配でしたがたくさんの学生が来てくれて嬉しかったです。商品を見て，可愛い！凄い！などの反応を見て，私が実際に作ったわけではないがとても嬉しい気持ちになりました。

Dさん：④授業でチラシが配られていたこともあり，実施していることは広まっていたと思います。同じ3年生はゼミでない限り授業がなく，朝から来てもらうことが難しかったので，時間帯もこれから考えていけたらと思います。⑤授業時間の関係で，利用者さんと会えなかったり，焦りながら商品を選んでおられる姿も多く見られましたが，周りには「やってたね！」と見てくれていた学生が多かったです。

Eさん：④クラスの仲良い友達には声をかけたのですが，私のクラスはみんな1～2時間目に授業がなかったため，一人しか来なかったです。しかし，販売実習を終えて，次回があるのならもっと宣伝しようと思いました。

Fさん：④ポータルを見たと言ってくれる友達が多かったです。ポータルに川田先生が宣伝を流して下さったので，認知してもらえたと思います。⑤事前に出店を知っていたかどうかに関わらず，私が思っていたよりも学生が立ち寄ってくれました。商品をかわいいと言ってくれたり，実際に購入してくれたりして嬉しかったです。

(3)⑥ 良かったこと・成果は？　⑦ 困ったこと・改善すべき点は？

Aさん：⑥私自身，障がいを持つ方々がどこでどのように働いているのかということが十分に理解できていませんでした。このような事業を行っていることも知りませんでした。きっと教育学部生の中でも私と同じような人が多い

第１回販売学習の振返りと今後の計画　ゼミにて20220622

と思います。ゼミの中で完結せずに，様々な人に活動を知ってもらえたのは大きな成果だと感じました。⑦入れ替えの時やはあてーの皆さんがいらっしゃった時に，人が多くてお客さんへの対応が難しい場面があった。時間の共有。

Bさん：⑥パンもお菓子も美味しくて，アクセサリーも綺麗で大人気でした！⑦人気すぎて売り切れが続出していたので，特にパンはもっと多くても良かったと思います。アクセサリーも女性物だった気がしたので，男性も手に取り

やすい物があればより売れたと思います。

Cさん：⑥今回，たくさんの方に購入してもらい，売れ切れた商品が多くありました。その時に「はぴすま」の方とやったー！とハイタッチをしました。買った学生に笑顔があったし，私達もずっと笑顔でみんなで楽しくできて良かったなと思いました。⑦今回はお菓子系がとても売れていました。はあてーさんの作ってくださったピアスやイヤリング系も買ってくれてはいたがどっちも売れるようにもっとおすすめした方が良かったのかなと思いました。キャンパスツアーのあんまり出来なかったのでもっと時間があれば良かったなと思いました。

Dさん：⑥品物を作られた方と一緒に販売を経験することができて，お客さんに喜んでもらえる嬉しさを感じることが出来ました。同じエプロンを着るだけでも一体感が出て良かったと思います。また，吹田に住んでいない学生が多いですが，すいパンが完売したように，かわいいと手に取ってもらい知るきっかけになったのではないかと思います。⑦後半全員が揃った時に，「お客さんへの圧がすごいね」と話にも出ていた，売り手の人数を考えていけたらと思います。食堂が混む時など学生の人数の多いとき少ない時に対応してなにか出来たらと思います。

Eさん：⑥良かったことは，とにかく想像以上に繁盛したことでした。成果は，商品を売るために，どのような声掛け等の接客が良いのかを考え実行できたことです。⑦困ったことは風が強かったこと以外，特になかったです。改善すべき点は，私自身ですが，準備段階からもっと機敏に働くことができた点と，イヤリングとピアスの違いがわからず，そこだけ接客することが難しかったので，勉強不足だった点です。

Fさん：⑥障害の方のいろいろな思いを知ることができ，どのように取り組まれているのかを施設の方を通して知ることができました。⑦特にわかりません。

Gさん：⑥私たちもその他の学生も含めて，障がいのある方が通う作業所の活動・商品を知ることができるきっかけになれたと思います。また，元から商品を作って販売していると知っていた人も，実際にお店に行っている人は少ないと思うので大学というみんなが使う場で開催できたことがとても良かったと思います。⑦アクセサリーが女性用が多かったので，男性向けデザインも用意して頂く，クッキーなどは最後の方品薄になっていたのでたくさん用意して頂く，障がい者施設の出品であるとわかりやすくするなど。

(4)⑧ 今回の活動は，学生や大学内での障がい者理解・インクルーシブな姿勢へのきっかけになるでしょうか？　⑨ 今後の進め方に提案は？

Aさん：⑧活動について理解してもらい，興味を持つきっかけとしてはとても良い機会だと思いました。

Bさん：⑧なると思います。実際に障がいのある方と一緒に活動していたので，そういった部分を広報していくと，皆がインクルーシブの姿勢になってくれると思います。⑨販売実習すごく楽しくできて，事業所の方とも沢山お話ができたので，勉強になりました！ 次販売する時はもっと売り出してもいいかもです！

Cさん：⑧なるとは思います。しかし，購入した学生が，その商品が障がいを持っている方が作ったということを知っているのかがわからないです。もしかすると私たちが作ったものを売っていると勘違いしていた学生もいたのかな？と思いました。⑨今後も他の施設の方々とこのような販売を出来たら良いなと思いました。そうすることで，より大和大生の障がいを持つ方への印象が変わるのではないかと思いました。私も楽しかったですが，施設の方々にも楽しんでもらえたのではないかと思います。とても良い経験になったので，今回はゼミ生しかいなかったですが，もっと他の学生にも経験して欲しいと思いました。

Dさん：⑧きっかけになったと思います。キャンパスツアーをしている時も，他の学生に会うことが出来たので，普段なかなかできない関わる機会になったと思います。⑨もっともっと色んな人に知ってもらえるように，毎月の定期開催ができたらいいなと思います。

Eさん：⑧利用者様が来られるまででも十分きっかけになるくらい様々な方に知って頂けたと思いますが，来られてからは実際に利用者様の接客で興味を持って頂けていたので，インクルーシブな姿勢へのきっかけに十分なっていると思いました。⑨今後は特に人気があったパンを，作れるなら3倍くらいあっても売り切れるのではと思いました。

Fさん：⑧授業を聞く，文章をよむ，だけではなく，やはり実際に体験してみたり，事業者さんから話を聞くことでよりインクルーシブな姿勢

につながると思いました。

Gさん：⑧普段障害のある方について学んだり，関わることのない学部もあるので，大学に来て頂くということにはとても意味があったと思います。こういう物を作ったり，販売したりしているということを知らない人もいたと思うので，良いきっかけになれたと思います。⑨定期的に開催することができれば，もっと障がい者施設についての認識や理解が深まると思います。可能であれば，のぼりなどがあれば遠くからでも何をしているのかが分かって良いと思いました。

この日の活動が奏功して今年度の毎月開催が認められた。翌週のゼミでは今後に向けての計画や改善点などが主体的具体的に話し合われた(図１)。

3)新聞記事とその反響

大阪日日新聞に記事が掲載されたのは6月21日だった。納島記者から新聞をいただき，学内や「はぴすま」さん吹田市障がい福祉室さんなどと共有し合ったが，思いがけないところからも反応があった。大阪府教育庁 教育振興室 支援教育課参事　坂田定行氏からのメールである。

「障がい者就労施設で作った授産品の販売を学生さんたちも共同で行われているとの新聞記事を拝見しました。

川田先生のアイデアが活きるいい取組みですね！ 様々な視点で障がいのある人たちを見ることができるよう学生を育てていただくことは，たいへん有意義だと思います。 大阪の支援教育に尽力いただけ

(19)　2022年(令和4年) 6月21日 土曜日　大阪日

大和大で授産品販売

岐阜支援教育学習の一環

吹田市の大和大で11日，障がい者の作ったパンやクッキーなどを販売した。同大教育学部の川田裕子准教授（障害児教育）が授業の3年生に「障がい者就労施設の学習」と題し，吹田市内の就労支援施設の協力を得て，授業として学生が販売した。同学部の学生は「はぴすま」が，特別支援教育の学習の一環として，学生たちが販売を行った。

障害児の販売を行った学生ら

図2 大阪日日新聞 記事 20220621

る学生をお待ちしております！今後ともよろしくお願いいたします。」坂田氏はかつて校長会での同僚である。府の幹部となり激務のなか，小さな記事を見逃さない応援のエールに支援教育のプロ魂を感じた。府立吹田支援学校の内藤孝彦校長も電話をくれた。「吹田支援学校も誘ってほしかったなあ。一緒にやりましょうよ，うちと大学とも。」

2. 第2回目の活動と学生からの反響

1)活動概要

第2回目日程が決定したのは1週間前だったので，「はぴすま」さんの事業者さん決定もチラシつくりも急ピッチで対応いただき(図3)，なんとか7月13日10:00～12:30で開店，活動にこぎつけた。今回の「はぴすま」さんとのペアは「第2さつき作業所」さん。利用者さんは2名の参加だったが，自らがふだん作業所で作った炭酸せんべいなどを販売された。1名はレジを打ってお釣りを渡す係，もう1名は商品を袋に入れてお客に渡す係と，2人とも学生と対面でのやり取りに直接参加いただけた。学生たちが気遣ってお釣りの計算をゆっくり待ってくれたり，利用者さんの手元を注目するあまりお釣りを受け取って商品を忘れそうになったりなど熱心に係わってくれた。

2)お客(学生)の受け止めは？

当日の夜に1通のメールが届いた。「教育学部4回生○○○美です。前回は授業のタイミングが合わず行けませんでした。なので，今日の開催をとても楽しみにしていました！

クッキーとすいパンを購入させていただき，どちらもとっても美味しかったです!!

商品数も豊富で嬉しかったのと，何より障がいのある方ない方関わらず，力を合わせて販売，会計，袋詰め，手渡しまでしてくださり，とてもあったかい気持ちになりました。

同じクラスの友達も，お昼ご飯に同じすいパンを食べてる子いっぱいいて，食後にはクッキーをみんなでシェアして食べて，，と，最近教採づけの日々なので，みんなで楽しくご飯を食べるいいきっかけになりました。

図3 第2回のチラシ(下半分は施設紹介)

私事ですが，大学生になってから今もアルバイトで，障害のある方と行動を共にする仕事をしています。

行動援護，生活援護が主な仕事なので，障がいのある人たちが

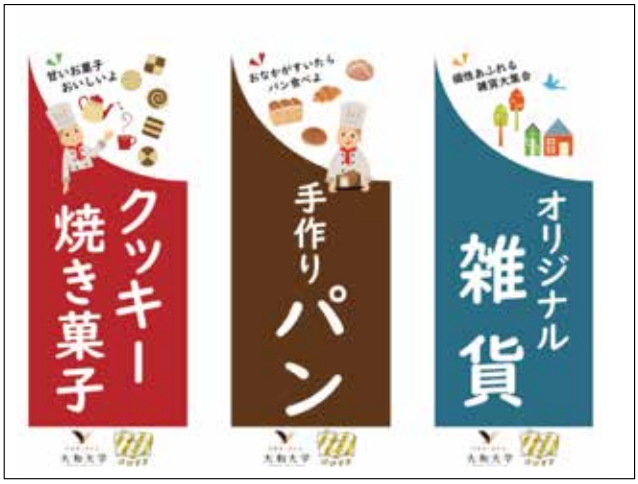
日中，作業で何かを作ったり販売するのを直接見たことがありませんでした。作業所での様子や頑張ったことは，本人から話では聞くものの，イメージだけだったので，今日の販売の様子をみて，私が支援している人たちもこうやって頑張っているんだなぁと思うと，嬉しくなりました。また次回も是非開催してほしいです!! 授業が詰まっているので，休み時間しか伺えませんが，次もお昼ご飯の購入がてら買いたいです！川田ゼミの皆さんも，頑張ってください!!

（追伸）ひとつアドバイスというと厚かましいのですが，今日チーズのすいパンを買ったのですが，食べたらハムがたっぷり入っていて，びっくりしました！チーズだけだと思ってたので，なんだかお得な気分になりました。せっかくなので，「ハムチーズ」と明記した方がもっと売れるんじゃないかなぁと思います！」

心温まるメールをゼミ生や関係者で共有する一方，お客学生たちの感じ方や障がいある人の地域での暮らし・活動への理解啓発という目標へのアプローチ度は気にかかった。

3. 第3回目10月18日(火)11:40～13:00

前期の終了と夏休みを挟み，学生の主体的な動きや「はぴすま」さんの意気込みが見えてきた。以下３つの取組みが新たに実行されたのだ。



1)のぼりの制作 ↑

販売学習用ののぼりがほしい，という意見は1回目に出ていた。夏休みに「はぴすま」さんを通じて「ワークセンターくすのき」にデザインを発注する。9月に教育実習を控えた10月担当のAさんは実習直前までのぼりの原案作成と発注に尽力した。一足早く実習を終えたH さんに引き継がれ，くすのきから提示された3案をもとに，ゼミの時間にZoomで「ワークセンターくすのき」の身体障害の社員さんと「はぴすま」さんも交えて綿密な打ち合わせをした。大和大学のロゴも入れる。わかりやすい字体でかわいいデザイン性を保つ。学生の要望に応えてくれたデザイナーで当事者のOさんが言った。「グループホームで暮らす私たちは，大和大学の学生さんたちに夜勤などでお世話になっている。ほんとうにしっかり見守りや支援を受けている。今回大和大学の活動に係れて，逆にお手伝いができたようでとても嬉しいし光栄に感じます。」Hさんの顔がぱっと輝く。「わたしだ。私，グループホームで夜勤しています。」学生が地道に続けてきたアルバイトが障がい当事者の方との素敵な接点になっていたことを知り，双方に笑顔が爆発した。18日に上の図案ののぼりが秋風に揺れていた。

2)「ワークショップをやりたい」

図4 第3回販売学習(手前で販売，奥でワークショップ)

販売活動や授産品を通してだけでは利用者さんたちとお客の学生たちの交流が十分とはいえない。どんな利用者たちがどんな思いで活動しているのか，コロナ禍が好転するなら学生さんたちとの距離を詰めたい，というのが「はぴすま」さんの思いだった。10月の担当施設は精神障がい系の「のぞみ福祉会」で，器用な利用者さんたちがオリジナルの消しゴムハンコ制作を得意としている。「お客さんに好きなハンコを選んでもらって利用者さんがカードに押印してプレゼントしたい。」と「はぴすま」さんが発案された。新しいイベントなので学部長におっかなびっくり相談すると，「感染対策と通行の妨げに留意するなら了承する！」と前向きな回答をいただけてAさんはガッツポーズで教育実習へ出発した。(図4)

3)「買いに来てくれる学生たちの気持ちを知りたい」…シールアンケートの実施

「クッキーを作ったのは学生？」という質問があったらしい。会場に立って不慣れながら懸命に接客している利用者さんが白衣に身を包んで焼き上げている姿をイメージするのは難しいのか。一方でゼミ生たちは一般学生からの真摯で素朴な疑問を感じ取っていた。「収益は？原料代や光熱費，給料との採算は取れるの？」「毎日どんなところで活動している？」…。お客に手間をかけないリサーチが必要だと，購入後にシールアンケートに応じてもらうことにした。

図5　アンケートに参加する学生たち　シールアンケート

Ⅳ．考察と今後の展開

１．11月20日㈰の和纏祭（学祭）に向けて－大学の地域貢献

コロナ禍で2020年度の学祭は見送られ，2021年度は2日の予定を半日に縮小した。今年2022年は19，20日2日開催と学生が希望する芸能人も参加して華やかにやりたい，と実行局の某4年生は意気込みを語り，計画を進めている。販売学習の11月担当ＤさんＣさんも9月上旬の実習開始直前まで実行局に申し込み手続きや必要什器類(テント，机，いす，のぼりを立てる重し，ワークショップの過熱機材etc…)の手配に注力した。「学祭経験してないんでわからない…」と言いつつ，「はぴすま」さんともメールのやり取りをして遺漏が無いように詰めていった。9月末にはDさんCさんともに実習で不在だったがゼミに実行局の某4年生氏が来てくれて，ゼミのまとめ役EさんとHさんを中心に確認ができた。学祭の出店イメージが共有された。ワークショップも第3回での盛り上がりに力を得て消しゴムハンコに，「アロマワックスサシュ」制作(図6)やおもちゃ釣りも加えて活動できそうだ。創立わずか9年目の本学では学祭が地域に開かれてきたとは言い難い。その中で地元吹田市との連携は堅持している。コロナ禍の鎮静化と相まって，地域の子どもたち，障がいのある人々やその家族などが学生と活動を共にし，地続きで暮らしている実感を共有する機会になってほしい。

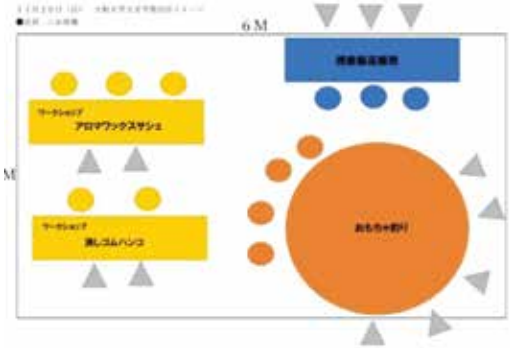


図6「アロマワックスサシュ」次回予定

２．ゼミ生の学びを深める

現行学習指導要領の理念に，主体的対話的な深い学びと未知の状況や社会・人生に生かせる資質・能力が謳われている。川田ゼミでは障がい者施設との販売学習のほかに「インクルーシブ教育」や貧困・格差などの社会問題について学んでいる。

1)「インクルーシブ教育」

学ぶうちに「インクルーシブ教育って理想的なのはわかるけれど，障がいのある子どもにとって本当に有益な心地よいものなのだろうか？」と一人が口にし，数人がうなずいた。支援学校の手厚い教育に惹かれるのは当事者や保護者だけではなく，教員をめざす者にもいる。一応ノーマライゼーションの潮流のなかで実際に学校を卒業した障がい者たちがどのような進路を辿り，地域での生活を成り立たせているのか[5]，ゼミ生たちがその現実をしっかり見て，考えて，そのうえで「インクルーシブ教育」を自分の頭で考えてほしいと思った。彼らはたぶん理論や理屈を教わっても納得できない。販売学習で繋がりができた障がい者福祉施設を見学・調査させていただき，自分で「インクルーシブ教育」について考え，日本の特別支援教育を「分離教育」とする国連勧告の示すところを理解してほしい。

2)ディーセントワーク

20世紀の終わりにILOで提唱されたのは「働きがいのある人間らしい仕事」曰く「権利が保障され，十分な収入を生み出し，適切な社会的保護が与えられる生産的な仕事を意味します。それはまた，すべての人が十分な仕事があることです。」

「はぴすま」の創設には工賃向上の切なる思いがあった。2022年3月まで大阪府「工賃向上計画の推進に関する専門委員会」委員を務めた「はぴすま」店長井上さんは「全国で大阪府の工賃はべべたから2番目でした。」と笑う。吹田市は府内ではトップクラスだそう。障がい者の1か月の給料(工賃)が12,000円と聞いて学生たちは絶句する。授産品の販売学習を通して，ゼミ生たちにアイディアはないだろうか。新しい価値の発見や働きがいの意味づけを期待したい。

3)ヴァルネラビリティーと地域移行・地域定着

障がいのある人々を「要援護層」とひとくくりにすることは誤りである。しかし障がいがほかの何らかのリスクに対する無防備，脆弱さ，抵抗力の小ささなど

[5]五石敬路・川田和子「子ども支援とSDGs」第8章「障がい者も自ら立てる―持続可能な共生社会へ」

と重なった場合，障がいのある人やその家族はヴァルネラブルな人々「要援護層」になることがあると指摘されている。[6][7]

第4期吹田市障がい福祉計画(H27.4～H30.3)には，障がい者の抱える課題を高齢者，子どもの貧困，子育て支援，ひとり親(母子)，ひきこもり，出所者等のヴァルネラブルな人々「要援護層」と包摂して切れ目のない・谷間のない支援体制の構築をイメージしている。2015(H27)年から施行された生活困窮者自立支援法の困窮者対応「ワンストップ窓口」を行政が強く意識し，縦割構造の克服でインクルーシブな地域共生をめざしたことがうかがわれる。その方向性は現行の第6期吹田市障がい福祉計画(R3.4～R5.3)にも引き継がれ，吹田市内ではフォーマルな行政の取組みとインフォーマルな「はぴすま」など民間やNPO的な活動が協力しながら福祉政策の進展を支えているのを感じる。障がい者の地域移行に必須な条件が3つある。①住むところの確保　②就労や日中活動の場　③支援体制の整備である。

これらは障がい者に限らない。前出の「要援護層」にとっても同じである。

公立学校の教員をめざす学生たちに，今の社会での「要援護層」が地域で自立していくためのこの3つの条件をどうクリアして日々を繋いでいるのかを知り，その子どもたちが将来の夢をみつけ現実化していくための具体的支援ができるよう，体験的な学びを深めさせたい。

学生には「販売学習」を切り口に，ともすればクロスする機会の少なかった社会の多様な状況を知り，課題解決への柔軟さしたたかさを培ってほしい。ゼミ生には販売学習で連携した３つの福祉施設「はあてー」「第2さつき福祉作業所」「めぐみ福祉会」を訪問し，利用者さんたちの①②③について調査・研究を求めていく。研究活動のなかでゼミ生たちの弱者に寄り添う社会人・教員としての軸の涵養と，地域の活性化に取り組む大学としての大和大学の一部としての方向性を見据えていきたい。

謝　辞

初めての試み，障がい者施設と連携したゼミの販売活動を許可し協力くださった大和大学，ゼミ生への指導や障がい者福祉施設との連携を導いてくださった「吹田市障がい者の働く場事業団(「はぴすま」)」さま，応援やアドバイスをくださった吹田市福祉部障がい福祉室さま・「すいた障がい者就業・生活支援センター」さまに深く感謝するとともに今後のご支援をよろしくお願いいたします。

注・引用文献

(1)朝日新聞デジタル2022/9/14(水),朝刊10/10森本美紀
(2)貧困研究vol.25「コロナ禍と貧困—格差の拡大・政策の検証・困窮者支援の現場－」2020.12
(3)厚生労働省
https://www.mhlw.go.jp/kokoro/edification/index.ht
(4)五石敬路・川田和子「子ども支援とSDGs」第8章「障がい者も自ら立てる—持続可能な共生社会へ」
(5)田中智子「知的障害者家族の貧困—家族に依存するケア」2020.4
(6)岩田正美・大橋謙策・白澤政和「現代社会と福祉」2019.6

参考文献

吹田市福祉部障がい福祉室・児童部子育て政策室
・第4期吹田市障がい福祉計画
・第6期吹田市障がい福祉計画　第2期吹田市障がい児福祉計画

[6]田中智子「知的障害者家族の貧困—家族に依存するケア」2020.4
[7]岩田正美・大橋謙策・白澤政和「現代社会と福祉」2019.6